

七十七ビジネス大賞受賞

第13回(平成22年度)

企業 インタビュー

Interview

奥田建設株式会社

代表取締役社長 奥田 智 氏



会社概要

住 所：仙台市青葉区八幡6丁目9-1
設 立：昭和40年（創業：昭和24年）
資 本 金：88百万円
事業内容：総合建設業
電 話：022 (275) 2311
 0229 (67) 5108（葉來山葵栽培園）
U R L：http://www.okuda.ne.jp/
 http://www.ykri.jp/（葉來山葵栽培園）

宮城県・仙台市を代表する数多くの建築物を施工し、都市開発・経済発展に大きく貢献、建設業の新分野進出としても注目を浴びる県内有数の総合建設業

今回は「七十七ビジネス大賞」受賞企業の中から、奥田建設株式会社を訪ねました。当社は創業以来、総合建設業として企画から設計、施工、監理、保守に至るまで総合的なシステム産業化を目指し、業容を拡大。また、地域貢献や地域活性化、雇用の拡大を掲げ、新規事業のワサビ栽培事業や飲食業を展開。当社の奥田社長に今日に至るまでの経緯や事業の特徴などについてお伺いしました。

地域に生き、地域を愛する

——七十七ビジネス大賞を受賞されたご感想をお願いします。

大変名誉ある賞をいただき光栄に思っています。これもひとえに、お客様をはじめ、協力会社や金融機関等多くの皆様のご指導・ご支援のおかげであるとともに、創業以来の社員全員の日々の努力の結果であろうと思っています。

また、これまで受賞された企業様を見ても、県内で名だたる企業様ばかりであり、身の引き締まる想いです。社長に就任してまだ日の浅い私にとって、非常に心強い賞をいただけたと嬉しく思っています。この賞を励みとして、そして賞の名に恥じぬよう、今後も事業に邁進していきたいと考えています。

——創業の経緯についてお聞かせください。

昭和24年3月に地域に根ざした総合建設業として創業しました。当初は、奥田工業所として創業し、昭和49年9月に現在の組織である奥田建設株式会社となりました。

——経営理念についてお聞かせください。

「より豊かな地域社会の実現に貢献する」ことを経営理念の一つに掲げています。建設業の社会的使

命と役割を深く認識しながら、お客様の多種多様なニーズに応えられるよう、技術の研鑽と向上を図り、経営体質の強化に努め、広範な活動を展開しています。そして建設業を通じて、「いかに地域に根ざす価値ある建造物をつくるか」をテーマに、限られた国土を有効的に活用し、より快適な空間を生み出すことに努めています。

また、創業以来「地域に生き、地域を愛する」気持ちをもって、宮城県を中心に事業を展開してきました。当社を育ててくれた地元のためにも、ワサビ栽培事業やビオトープ創出等を通じ、地域住民との交流に積極的に取り組むことで、「街づくりの推進役」として地域社会に貢献していきたいと考えています。

建設業は以前3K産業の代表とも言われ、また近年の公共事業の抑制の影響もあり、どうしても悪いイメージが先行しているようですが、もし建設業がなければ道路も建物もできないでしょう。私は、「建設業が人々の暮らしを支えている」と自負しています。「建設人」として、真のプロフェッショナルであるという誇りを胸に、新分野などにも積極的に挑戦していきたいと考えています。

総合建設業として

——事業内容について教えてください。

単に工事を請負い、施工を行うのではなく、企画



本社

から設計・施工・監理・保守などの不動産、プランニング、メンテナンス部門を含めた総合建設業として事業を展開しています。

ユアテックスタジアムや宮城スタジアム、東北自動車道富谷ジャンクションなどの宮城県を代表する建造物を施工しているほか、マンションや病院、庁舎、学校、スポーツ施設、トンネル、ゴルフ場など多種多様な建造物等の建築実績があります。日本の伝統的な木造建築から、ビルなどのあらゆる建造物と道路、橋梁、河川などの土木工事に当社の総合的な技術力が発揮されています。

——御社の特徴について教えてください。

企画設計の段階でお客様のニーズの本質を捉えた綿密な分析を行っています。建造物は、一定期間をかけて様々な工程を経て完成する「一品生産」に特徴があります。そのため、立地調査が前提となり、企画段階での検討が非常に重要なポイントとなります。シミュレーションのいかんによって完成後の価値が決まるため、基本的な建設設計の立案は工程の大きなウエイトを占めていると言えます。設計において機能、工期、コスト、安全性を十分クリアした上で着工へと進みます。

建造物は、専門技術や技能が集約されており、複雑な工程を消化しながら各段階を経て工事が進められていきます。当社と専門工事の協力会社との間で役割分担を行い、より良いメーカーと資材を選択し、総合管理を行うことで、効率的な施工体制をとっています。また、コンピュータの導入により生産性を高め、精度の高い施工に努めています。

ニーズに応えるために

——建設業で重要とされる設計立案の工程を教えてください。

設計段階では、お客様のあらゆるニーズの展開を加味して建設計画を検討する企画設計、機能やグレードを織り込んで意匠面も考慮する基本設計、詳細な図面を作成する実施設計の三段階があります。

基本設計の段階で、綿密なスケジュールを立て、工事費の概算を固めます。実施設計に入る前に繰返し検討を行い、工法の採用や安全対策、工期の最終

確認を行います。特に特徴のある建造物では、メーカーや資材業者、専門業者との十分な打合せが必要になります。

実施設計の段階では、建設設計とあわせて構造、設備面での検討が行われ、インテリア、テナント設計が並行して行われます。実施設計が進むと官公庁との事前打合せや地域住民との協議を行います。図面が完成した段階で積算が行われ、予算書が作成されてはじめて請負契約の検討に入ります。

——人材育成についてお聞かせください。

「人材こそシステム・オーガナイザーとして展開可能な企業発展の原点」という基本理念のもとに、当社では社員教育に重点を置いています。また、会社全体の一体化を図るために、研修会をはじめ、図書室・厚生施設の充実を図っています。特に遠い現場で作業する社員もいるため、研修会は有効な手段と言えます。

建設現場では、品質の良いものをより早く、より経済的につくることが望まれますが、その前提には常に安全があります。「安全性を最優先すること」を重視する当社では、特に安全面の研修に力を入れており、定期的に開催することで社員の安全意識の徹底を図っています。

未来の子供たちのために

——環境理念についてお聞かせください。

工事は、当社の独断ではなく、発注者と契約者の同意のもとに行われますが、時には山を削って道路や団地をつくるため自然体系を壊してしまっているのも事実です。そのため、以前より何らかの形で自然の再生に関わりたいという強い思いがありました。特に、当社は広瀬川の中流域に社屋を有しているため、広瀬川への関わりは義務であると考えていました。その折に、「NPO法人広瀬川の清流を守る会」の自然環境に対する思いに触れ、その思いを共有し、環境問題への関わりを模索してきました。

当社では、動植物の息吹を再生させ、保護する場所として蕃山（仙台市青葉区）にビオトープを創出しました。蕃山の樹木にカブトムシが群れ、野草花が風にそよぐ昔ながらの風景を取戻したいですね。

「自然を守り、次世代に引き継ぐ」活動を通して、社員のみならず地域住民の方々の自然保護に対する意識を高め、自然の中で子供たちが体験学習を通し、何かを学びとる手助けになればと考えています。

——ビオトープ創出の具体的な取組みについてお聞かせください。

ビオトープ創出の取組みの一つは、「ホテル観察会」です。子供たちに「ホテルを見せたい」という一心で、平成15年1月に始めました。幼虫から育てたため、実際にホテルが自生をするまでは大変でした。今年で8回目を迎え、多い年には約2,000名に参加していただいています。子供たちだけではなく、家族全員に喜んでもらっているようです。

二つ目は「カブトムシと触れ合う会」です。「カブトムシはデパートで売っている虫だ」と思っている子供が多いと聞きショックを受け、そんな子供たちに「カブトムシ本来の木にすがって蜜を吸う姿を見て欲しい」という思いから、平成16年7月から始めました。社員が羽化をさせ、飼育し、子供たちにプレゼントしようという試みです。実際にプレゼントした子供から、カブトムシの飼育の様子を知らせる嬉しい手紙をもらうこともあります。

——その他にはどのような社会貢献活動を行っていますか。

近い将来に必ず起こると想定されている宮城県沖地震に備えて、平成17年4月に災害情報チームを発足しました。地震以外にも、台風や大雨など災害が発生する恐れのある場合に技術社員7名でパトロールを実施しています。当社社員は、山奥や河川などでの工事経験から地形を把握しているため、ポイントを定めた効率的なパトロールを行うことができます。実際に状況を役所に報告し、二次災害を未然に防ぐことができた事例もあります。

また、非常時に備え、当社の地下に食料と水の備蓄を行っています。地域住民への説明も定期的に行い、実際に備蓄の状態を見学してもらうこと



災害情報チーム

で、非常時に速やかに配給できるような体制をとっています。

「薬来ワサビ」への挑戦

——新分野進出の経緯についてお聞かせください。

建設需要低迷の中、国土交通省は「新分野参入」を促進しておりました。当社では、奥田和男前社長（現会長）が建設業界の会長を務めていたこともあり、率先して新分野参入を模索してきました。福祉分野や風力発電、飲食事業など様々な検討を重ねた結果、ワサビ栽培事業に取組むことになったものです。ワサビ栽培事業は、当社の環境理念にもマッチしており、また他に追随されにくいことなどが決め手となりました。「建設帰農」という言葉に象徴されるように、本来建設業と農業とは深い関わりがあるため、農業分野への進出は自然の流れだったのかもしれない。

ワサビ栽培に適した場所を見つけるまでには半年を要しました。宮城県内全域を探し、加美町の水にめぐり合いました。2005年の春に事業を開始し、同年12月にワサビ苗の最初の植付けを行いました。農地法の壁もありましたが、加美町の熱心な地元農家の協力のもと「加美町わさび生産組合」を設立し、事業を展開してきました。地元の多くの人の協力を得たワサビ栽培事業の理念は、「本物志向」「地域貢献・地域活性化」「雇用の拡大」です。「地元に関わり」ということを大きな柱にすえています。

——ワサビ栽培事業について教えてください。

平地を利用した「ボックス方式」を採用し、現在は1ヘクタールに4万4千株を育てています。自然地形を利用した「棚田栽培」とは異なり、日光や水を均一に与えられるため、安定供給が可能です。加美町のおいしい水が何よりも強みですね。収穫物は、ほぼ市場を通さずに直販しています。「薬来ワサビ」の名前は、県内ではだいぶ浸透してきましたが、全国的にはまだ無名と言えます。2010年の台湾への出荷を突破口に、「輸出ブランド」として県外や海外にも売り出していきたいと考えています。

また、栽培にとどまることなく、加工品の商品開発も行っています。加工品作りに関しては、全くの新規参入なので意欲のある事業者とのめぐり合いが大きかったと思います。ビジネス商談会など様々な場所に積極的に参加し、バイヤーだけでなく出展者とも連携し、ギフトセットの販売なども行っています。連携にあたり当初は苦労しましたが、知名度が高くなった最近では、声をかけてもらうことも多くなりました。永年建設業で培ってきた人脈と信用力も非常に大きいと実感しています。



ワサビ栽培事業担当瀬尾誠企画部長（左）と作業風景（右）



販売風景（左）とわさび茶屋（右）

——今後のワサビ栽培事業の展望についてお聞かせください。

将来的には、スキー場やゴルフ場などが隣接する「薬来リゾート」周辺に「薬来ワサビ郷」をつくれたいですね。その第一弾として、平成21年10月に、ワサビの食文化を発信するアンテナショップとして「わさび茶屋」をオープンさせました。第二弾では、ワサビの文化を体験できる「ワサビ資料館」を考えていますが、まずは「わさび茶屋」を加美町だけではなく仙台市内の中心部にもオープンさせたいと思っています。

当社では、ワサビ事業を通じて、加美町や地元農家、地元企業、地元大学、農業高校などと様々な形で連携を行ってきました。宮城大学のあるゼミでは、「薬来ワサビ」を使用したご当地やきそばを考案し、学内審査で一位になったと地元紙が報じ話題になりました。「地域資源にしよう」と考えていたことが、学生側からの働きかけで認められたようで非常に嬉しい出来事でした。「薬来ワサビ」を地域資源として浸透させ、地域活性化の核として育てていきたいと考えています。

常にチャレンジする気持ちで

——最後にこれから起業する方へアドバイスをお願いします。

創業以来基本理念に忠実に、地域に根ざし事業を発展させてきましたが、同時に常にチャレンジする気持ちを大切にしてきました。新分野に参入したのもまさにその一貫であり、地域社会に貢献するために今後も新たなことにチャレンジし続けたいと考えています。

厳しい時代ですので、起業をするにあたっては苦労される事も多々あるかとは思いますが、人と人の関係を大切に、そして初志を忘れずにチャレンジして欲しいと思います。



奥田社長

長時間にわたりありがとうございました。御社の今後ますますの御発展をお祈り申し上げます。

本インタビューは平成23年1月21日の取材によるものです。